

松江に人が住み始めた頃 -氷河時代を生き抜く戦略-

島根県古代文化センター 丹羽野 裕

1. 松江に人が来る前の人類の歴史

(1) 私たちは誰なのか・・・

「ホモ・サピエンス」と呼ばれる、霊長類ヒト科ヒト亜科に属する動物
現在、地球上に生息する唯一のヒト科の動物である。

しかしかつて、地球上には私たちとは異なる人類が生存していた。

(2) ホモ・サピエンスが生まれるまで

人類の歴史は、およそ700万年前にさかのぼるといわれる。
アウストラロピテクス類などの猿人がアフリカで暮らした。
しかし彼らはアフリカを出ることはなかったと考えられる。

約180万年前に、アフリカの猿人の一部が原人に進化。
原人は、明らかに石器などの道具を製作。
一部の原人はアフリカを出てユーラシア大陸に広がる。
アジアでは北京原人、ジャワ原人など

約60万年前、原人の一部から旧人(ネアンデルタール人など)となる。
脳の容量が格段に増え、石器も複雑なものを作るようになった。
しかし生活する範囲は、原人のそれと大きな変化はなかった。

(3) ホモ・サピエンスの誕生と拡散

ホモ・サピエンス(新人)の誕生には大きく二つの説がある。

多地域進化説

100万年以上前にアフリカを旅立った原人たちが、アフリカとユーラシアの各地で、互いに独立性を保ちながら、原人→旧人→新人という段階を踏んで現代人に進化したという仮説。

アフリカ単一起源説

現代人の祖先は、10～20万年前ころにアフリカで誕生した新人であって、この新人が世界各地へ拡散し、原人たちの子孫である旧人とおきかわって、各地の現代人になったという仮説。

現在人類学では、アフリカ単一起源説が定説化しつつある。

DNA分析の進化がその背景

つまり、現代の地球上に生息するすべてのヒトは、そのルーツをたどるとアフリカに行き着くということである。

ホモサピエンスの出アフリカと拡散

5～6万年前、ホモ・サピエンスは西アジアに生活域を拡大。

やがてあるものはヨーロッパへ、あるものはシベリア方面へ、あるものは東南アジア方面へと拡散していった。

4万年前にはスンダランド(マレー半島から現在のインドネシアなどの島々がつながった陸地)からオーストラリア大陸に・・・明らかに海洋を渡っている。

少なくとも2万年前にはシベリアのバイカル湖周辺に やがてベーリング海峡に向かった
1万4千年前には、広大な南北アメリカにまで広がる。

私たちホモ・サピエンスは、わずか数万年の間に極地を除いたほぼ地球全域に生活域を広げた。

すべての生物において、全世界のあらゆる環境に適応し生活しているのは、ホモ・サピエンスのみである。

ホモ・サピエンスは、身体を環境に適応させるのではなく、発達した脳をフル回転させて、様々な環境に適応し生き延びてきた。

(4) 日本に人類が到達したのはいつか・・・

約3万5千年前には、ホモ・サピエンスが日本列島で生活していたことは間違いない。
問題は、それより古く、人類がいたかどうかである。

この問題は、日本の旧石器時代研究が始まってまもなくから続く未解決の課題
ねつ造事件後、新たにいくつかの遺跡で問題提起

その一つが、出雲市の砂原遺跡である。

7万年以上前で、12万年前の可能性があるとされるが、学会で賛否両論渦巻く

報告書が刊行されると、新たな評価を巡る論戦が始まるだろう。

もし、7万年以上前となるなら、旧人もしくは原人の子孫が来ていた可能性が高いことになるが・・・

今日は、ホモ・サピエンス、つまり私たちと同じ現生人類の後期旧石器時代の行動に絞ってこれから話をしていきたい。

2. 松江市周辺の旧石器時代遺跡の分布と環境

(1) 旧石器時代の遺跡

松江市内に旧石器時代(の可能性のある)遺跡が47カ所

『日本列島の旧石器時代遺跡データベース』掲載

決して少ない数字ではなく、遺跡の集中地域の一つと言ってもいい

ただし、後期旧石器時代以降の土層の堆積状況が薄く、状態の良い遺跡は少ない。

(2) 旧石器時代の松江周辺の環境

後期旧石器時代の3万5千年前～1万6千年前は、いわゆる氷河時代(氷期)

平均気温は6度から7度程度は低かったと推測されている。

極地の氷が増加し、海水面は100m程度下がっていた。

松江周辺の地形環境も全く異なっていた。

宍道湖・中海は存在せず、現在の矢田渡付近を分水嶺として、東西に大きな川が流れていた。

川の周囲、特に宍道湖側では、段丘地形が広がっていたものと考えられる。

現地地形でも、松江市の南郊から旧玉湯町にかけては、一段高い段丘が広がる。

生態系も全く異なっていた。

海水面が下がった影響で、現日本海は南北の出入り口が狭く、今のように海流が流れ込む状況ではなかった。

よって冷涼で、いまよりは乾燥した気候だったと推測されている。

植物相も当然異なり、高山地域に近い樹木が生えていた。

針葉樹に、ブナ、ナラ類が混交し、比較的疎林で草原部分もあったかもしれない。

すでに絶滅した大型動物、ナウマンゾウやオオツノシカなども生息していた。

3. 旧石器人たちの生活様式

(1) 遊動

一定の場所にとどまって生活するのではなく、移動しながら生活を送るパターン
遊動生活と考える考古学的根拠

- ・住居遺構の僅少さ

- ・石器の出土状況→石器制作状況がそのまま残されるブロックなど

- ・石材と原石産地との関係

文化人類学の研究から見た狩猟採集民の行動様式

(2) 遊動ルートや範囲は何に導かれるのか

- 地形など物理的環境要因
- 食料獲得に関わる生態系のありよう
 - 大型獣などの季節的、あるいは長期的な移動
 - 植物質食料の季節的变化
- 必要資源の獲得
 - 生活に欠かせないのは、石器を作るための石材

4. 松江周辺を生活の舞台とした人々の遊動

出土した石器石材とその産地から、遊動ルートやパターンを推測してみる。

(1) 松江市内の遺跡から出た石器から

- 玉髓系(瑪瑙、碧玉含む)・・・最も多い石材
- 玉湯町の花仙山や周辺の段丘礫層で採取できる石材
- 黒曜石・・・隠岐産とみて間違いはないが、例は少ない
- 安山岩・・・備讃瀬戸(香川)産の可能性はあるが、例は少ない

後期旧石器時代以降の土層の堆積が少ないため、まとまりのある石器群がつかめない
松江市内の遺跡からだけでは詳細を語ることはできない。

(2) 周辺地域(特に中国山地)の出土状態の良い、まとまりある遺跡から考える

○ 原田遺跡(奥出雲町)

およそ2万9千年前～3万5千年前頃の層から出た石器群のまとまりから、石材産地を抽出し、その割合から遊動ルートを推測

隠岐産の黒曜石、松江周辺産と推測される玉髓系石材、広島県冠山産が中心と考えられる安山岩、地元の石材と考えられる石英・水晶、凝灰岩などが利用されていた。

- ・ 原田遺跡7層A群(1, 2, 3ブロック)
 - 8割以上の隠岐産黒曜石と1割強の玉髓が主要石材
 - 松江周辺を経由して隠岐に行き、原田遺跡にやってきた集団の姿が推測される
- ・ 原田遺跡7層B群(4, 5, 6ブロック)
 - 6割以上が安山岩、1.5割の黒曜石と、それぞれ6%の玉髓、水晶類
 - 松江周辺を経由して隠岐に行き、さらに冠山で安山岩を採取して、原田遺跡にやってきた集団の姿が推測される
- ・ 原田遺跡7層C群(9, 10, 12, 13ブロック)
 - 8割近い玉髓系石材と1.5割の黒曜石が主体
 - 隠岐で黒曜石を採取し、松江周辺で玉髓を補給して原田遺跡にやってきた集団か
- ・ 原田遺跡7層D群(15～23ブロック、環状ブロック部分)
 - 9割近い地元石材と1割の隠岐産黒曜石が主体
 - 隠岐で黒曜石を採取して原田遺跡に来、黒曜石をかなり消費した集団か

○ 恩原1, 2遺跡(岡山県鏡野町、旧上斎原村)

中国山地の鳥取県境から南へやや下った高原にある遺跡。

良好に滞積した火山灰に挟まれ、4つの文化層から石器が出土している。

香川県産の安山岩、隠岐産の黒曜石、松江周辺産と推測される玉髓系石材、地元の石材と考えられる石英・水晶、北陸～東北産と考えられる硬質頁岩などが利用されていた。

- ・ 恩原1遺跡R文化層(約3万3千年～2万8千年前)
 - 8割以上の地元石材を中心に1割の安山岩、0.4割の玉髓、わずかな黒曜石を利用
 - 瀬戸内から隠岐までを往来する中で、松江周辺で玉髓系石材を補給した集団か。
 - 遠隔地の石材はかなり枯渇し、地元石材を多用した状況がうかがえる
- ・ 恩原1遺跡O文化層(約2万7千年前)
 - 9割以上の玉髓系石材と0.5割の安山岩、わずかな黒曜石を利用
 - 瀬戸内から隠岐までを往来する中で、松江周辺で玉髓系石材を採取し、恩原に到着した集団か。
- ・ 恩原2遺跡S文化層(約2万5千年～2万年前)
 - 4割の安山岩、3.4割の玉髓系石材、1割の黒曜石、1割の水晶系石材が主体
 - 瀬戸内から隠岐までを往来する中で、松江周辺の玉髓をかなり利用している集団か
- ・ 恩原2遺跡M文化層(約1万8千年～1万6千年前)
 - 9割近い玉髓系石材と0.5割の隠岐産黒曜石、0.6割の硬質頁岩からなる

北陸～東北地方から山陰にやってきた集団が、隠岐を経由して松江周辺で多くの石材を採取し、恩原へ到達したものと推測される

- ・恩原1遺跡M文化層(約1万8千年～1万6千年前)

4.5割の安山岩、2割強の玉髓。わずかな黒曜石と硬質頁岩に地元石材

北陸～東北地方から山陰にやってきた集団が、隠岐を経由して松江周辺で多くの石材を採取し、恩原へ到達、その後瀬戸内まで移動して恩原に回帰したものか

5. 松江周辺に旧石器時代の遺跡が多いのはなぜか

地形や石材環境、生態系と人の生活様式との関係のなかで、考える。

(1) 玉髓系石材産地の存在

松江市玉湯町の花仙山を主産出地とする、玉髓（瑪瑙・碧玉）が、重要な石材だった。

山陰～中国山地の旧石器時代の遺跡の多くから玉髓を石材とする石器が出土

中国・四国地方の三大石材（隠岐の黒曜石、香川県のサヌカイト、冠山の安山岩）の間にあって、遊動生活における貴重な補完石材の役割を果たしたものか

旧石器時代末期の東北からの植民集団のように、特別に玉髓を選択する集団もあった。

(2) 松江周辺の地形環境

○隠岐への主要交通路上に位置していた。

宍道湖・中海は存在せず、現在の矢田渡付近を分水嶺として、東西に大きな川が流れ、東は日野川、西は斐伊川につながっていた。

南北をつなぐ、鞍部は重要な遊動経路だった可能性が高い

特に中国山地方面から隠岐に向かう、唯一のつながった尾根筋が松江付近分水嶺から川沿いへ向かう経路も、主要なルートだっただろう

○谷や平原を見下ろす平坦な地形

松江の南に広がる段丘地形は、平坦で住みやすく、また川沿いに移動する大型獣などを見通しやすい環境だったと推測される。

6. おわりに

旧石器時代が終わり温暖化が始まると、広い谷だった部分に海水が浸入、やがて宍道湖・中海となる

二つの川の分水嶺だった部分は両湖を結ぶ狭い水道（大橋川）となり水上交通の要衝となった。

この環境が古墳時代以降、松江が出雲の中心地となっていく大きな要因のひとつであった。

また花仙山の玉髓の一部は、玉作りの材料として古代出雲を支える手工業を発展させた。

数万年前の人々の歩みは、次の歴史に繋がっている。